

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 2 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370726

研究課題名(和文) 異文化接触・受容の視点から見た日本近代朝鮮語教育史の総合的研究

 研究課題名(英文) Comprehensive Study of History of Korean Language Education in Modern Japan:
Focusing on the Receptive Attitudes toward Korean Language as Component of
Different Culture

研究代表者

植田 晃次 (UEDA, Kozi)

大阪大学・言語文化研究科(言語文化専攻)・准教授

研究者番号：90291450

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、近代日本で朝鮮語に関わった人物らの経歴・活動・著作物を詳細に分析し、「代表的な朝鮮語の普及者」と評価されていた人物らに対する従来の評価が一方的であり、必ずしも妥当ではないことを実証した。これにより、ある人物が朝鮮語という異文化に接触した時、当時の社会的背景の中で如何にそれを受容する/しないことによって、どのような人生行路を歩むかということを示した。その結果、彼らのほとんどは朝鮮語の専門家ではない市井の人々であり、彼らにとって朝鮮語という異文化は、自らの人生を切り拓くために必要に応じて利用する着脱可能なアイテムに過ぎなかったということを示した。

研究成果の概要(英文)：This study examined the careers, activities, and textbooks of people who are associated with the Korean language in modern Japan, and determined that previous evaluations of these people were biased. We explored how a person perceives the Korean language as a component of a different culture after he/she encountered it. Results revealed that almost all of the study's subjects were not professional linguists but ordinary people, and that the Korean language was just another facet of their lives, such as their articles of clothing or houses.

研究分野：人文学

キーワード：朝鮮語教育史 韓国語教育史 異文化接触 旧朝鮮語学 朝鮮語 原物主義 人物史主義 現地主義

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、2005 年度以降、科研費のご配慮を受け、日本近代朝鮮語教育史の研究を行ってきた。基盤研究(B)「日本における朝鮮語教育史の総合的・実証的研究」(2005～2006 年度)での成果を基礎に、基盤研究(B)「学習書を通して見る近代日本における朝鮮語教育史の多元的・実証的研究」(2008～2010 年度)、基盤研究(C)「人物を通して見る近代日本における朝鮮語教育史の多元的・実証的研究」(2011～2013 年度)ではそれぞれ学習書・人物に着目して研究を進めた。

2. 研究の目的

本研究では、さらに、これまでの研究を統合し、朝鮮語教育史研究をミクロな視点からの事例研究から、マクロな視点からの理論的枠組として再構築することを目的とした。

これを図示すれば以下ようになる。

2014～2016 年度 基盤研究(C)
「異文化接触・受容の視点から見た日本近代朝鮮語教育史の総合的研究」
2005～2013 度の事例研究を異文化接触・受容の視点から理論的枠組として再構築

2008～2010 年度 基盤研究(B)	2011～2013 年度 基盤研究(C)
「学習書を通して見る近代日本における朝鮮語教育史の多元的・実証的研究」	「人物を通して見る近代日本における朝鮮語教育史の多元的・実証的研究」
対象:朝鮮語学習書	対象:朝鮮語学習書を著した人物(著者)
方法論の確立: 「人物史主義」・「原物主義」・「現地主義」	

2005～2006 年度 基盤研究(B)
「日本における朝鮮語教育史の総合的・実証的研究」
概略の素描・基礎データ作成

3. 研究の方法

これまでの研究によって打ち立てた「原物主義」(可能な限り影印本・復刻本ではなく、原物を実見した資料に基づいて研究を行う方法)、「人物史主義」(朝鮮・朝鮮語と関わらない時期を含めたその人物の生涯を通して、時代の中にその人物や著作物を位置づけて考察する方法)に加え、「現地主義」(その人物ゆかりの地を可能な限り実際に訪れ多方面から考察する方法)を方法論として打ち立てて人物史(その人物がどのような生涯を送ったか)と朝鮮語観(その人物が朝鮮語を言語学的にどのように分析・把握したか/できなかったか)の両面から研究を行った。

その上で、ある人物が朝鮮・朝鮮語という異文化と接触した際、それをどのように受容

したのか、あるいは受容しなかったのかという点に着目して、一面を見て人物を評価するのではなく、多面的な様相を実証的に明らかにし、朝鮮語教育史研究の枠組を再構築しようとした。

4. 研究成果

上述の目的・方法論の下で得た成果は以下の通りである。

(1) 朝鮮語に関わった人物の経歴・活動・著作物を詳細に分析することにより、その人物に対する従来の評価が一面的であり、妥当でないということを明らかにした。

これまでの研究でも、例えば、「代表的な朝鮮語の普及者」などと評価されていた島井浩が金融業・賃貸業の傍ら朝鮮語に関わっていた人物であったり、同様に評価されていた金島苔水が作り本の著者として朝鮮語に関わっていた人物であったという全く異なる姿を明らかにしていた。本研究では、さらに奥山仙三や山本正誠といった、学校で習得した朝鮮語を足掛かりに官吏や教員として活動した人物や、東京外国語学校朝鮮語科教授でありながら水泳・柔道の達人であると評価されていた本田存が、実は水泳・柔道の達人が朝鮮語も教えていた時期がある人物であったといった、朝鮮語に関わった人物の従来の評価を覆す姿も明らかにした。

それによって、ある人物が朝鮮語という異文化に接触した時、当時の社会的背景の中で如何に受容し、あるいは受容しないかによってどのような人生行路を歩むかということを示した。

その結果、彼らのほとんどは朝鮮語の専門家ではない市井の人々であり、彼らにとって朝鮮語という異文化は、自らの人生を切り拓くために必要に応じて利用する着脱可能なアイテムに過ぎなかったということを確認した。併せて、当時の日本人と朝鮮語との関わりについて、現代の視点から単純に評価を下すことはできないことも提起した。

これは現代日本における朝鮮語をめぐる状況とも少なからず通底するものであり、今日の朝鮮語教育にも多くの示唆を与えるものであることも明らかになった。

以上が従来の朝鮮語教育史研究と一線を画す最大の成果である。

(2) 「旧朝鮮語学」という概念の体系化を行った。

明治維新以降 1945 年までの日本人の朝鮮語研究には、一部の言語学的学術研究と共に、「旧朝鮮語学」と呼べるものが存在したことを明確化し、より体系化した。これは、「朝鮮語」(実用語学としての話しことば)と「朝鮮文」(行政・教

育等での書きことば)から成るものである。また、その特徴と変遷を解明した。
(3)「旧朝鮮語学」と欧米人の朝鮮語研究の関係を明らかにした。

従来、明治維新以降の朝鮮語研究を見る際にあまり着目されていなかった Podstavin、Gale、Underwood 他欧米人による学習書等を「旧朝鮮語学」という概念と併せ見ることによって、相互関係が明らかになった。

(4) 代表的な人物の人物史について、これまででない詳細な解明を行った。

新たに、奥山仙三・山本正誠等に代表される、講習会・学校といった朝鮮語を教える場を持ったために学習書類を残した人物の人物史を明らかにした。さらに、従来は対象とし難かった、著書を残さなかった人物として本田存の人物史を詳細に明らかにした。また、赤峰瀬一郎などすでにある程度人物史を解明していた人物について、空白部を明らかにするとともに、新たな視点から人物像を捉えなおした。この他、西村真太郎・船岡献治の人物史の分析、塩川一太郎に係る文書の調査、金澤庄三郎の朝鮮語研究の検討、朝鮮総督府警察官講習所での朝鮮語教育の概要の解明なども試みた。

(5) 学習書の書誌学的データを補充・精密化した。

国内の都道府県立・政令指定都市立図書館に所蔵される朝鮮語学習書について、原物主義による調査をほぼ終え、再確認すべき点の追加調査を行った。国内の市立図書館・私立図書館等についての継続調査のほか、大学図書館にも相当数の資料が所蔵されていることが明らかになったため、これまでの調査の空白を埋める部分を中心に調査を行った。国外の図書館についても、韓国・台湾の機関の蔵書について追加調査を行った。これにより、データが一層精密化した。

なお、これまでの経験に鑑み、研究成果の剽窃・盗用を回避するため、学習書の書誌学的データの現時点での公開は控えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

植田晃次、日本近代朝鮮語教育史の視点から見た山本正誠と朝鮮語 - 人物史と著書を通して -、言語文化研究 43、査読有、2017、pp.9-27、<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/handle/11094/61282>

植田晃次、奥山仙三と朝鮮語 - 編纂した朝鮮語学習書の性格に着目して -、日本語文化研究 第四輯(上) 査読有、2016、pp.101-111

矢野謙一、旧朝鮮語学と欧米人の朝鮮語学習書、日本語文化研究 第四輯(上) 査読有、2016、pp.335-342

植田晃次、(学術エッセイ)ひとりの人間とある言語との関わり方から見えること、植民地文化研究 14、査読無、2015、pp.175-177

[学会発表](計7件)

植田晃次、出稼ぎ書生・赤峰瀬一郎と朝鮮語 - 日本近代朝鮮語教育史の視点から -、第67回朝鮮学会大会、2016年10月2日、於天理大学(奈良県天理市)

矢野謙一、旧朝鮮語学の特徴と変遷、第67回朝鮮学会大会、2016年10月2日、於天理大学(奈良県天理市)

植田晃次、水府流太田派師範・講道館庶務課長・東京外国語学校教授 本田存、第102回 21世紀スポーツ文化研究会神戸例会、2016年3月27日、於UNITY(兵庫県神戸市)

植田晃次、本田存と朝鮮語 - 日本近代朝鮮語教育史の視点から -、第66回朝鮮学会大会、2015年10月4日、於天理大学(奈良県天理市)

植田晃次、奥山仙三と朝鮮語 - 編纂した朝鮮語学習書の性格に着目して -、第4回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム、2015年8月18日、於延辺大学(中国延吉市)

矢野謙一「旧朝鮮語学と欧米人の朝鮮語学習書」第4回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム、2015年8月18日、於延辺大学(中国延吉市)

植田晃次、近代日本人と異文化としての朝鮮語との接触 - 日本近代朝鮮語教育史試考 -、第65回朝鮮学会大会、2014年10月5日、於天理大学(奈良県天理市)

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

植田 晃次 (UEDA, Kozi)
大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授
研究者番号：90291450

(2) 研究分担者

矢野 謙一 (YANO, Ken'ichi)
熊本学園大学・外国語学部・教授
研究者番号：00271453

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()